

「木幡の時雨」の再検討：中世物語史・序説

辛島，正雄

<https://doi.org/10.15017/2332653>

出版情報：文學研究. 81, pp.89-111, 1984-02-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『木幡の時雨』の再検討

—— 中世物語史・序説 ——

辛 島 正 雄

は し が き

とほちの里の衣うつ槌の音も、朝の露にことならぬ身を、いつまでとかいそぐらんと、いとほかなく聞き臥したまふ夜なよなは、いとど昔の御面影のみ立ち添ひて、母上の御心のつらきにつけても、なほおはすらん所へとく迎へ取りたまへと、朝夕御行ひをしつつ、涙を浮けてながめおはする御ありさま、古の衣通姫などもかうこそは、とおしはかられて、…… (一オ)

物語『木幡の時雨』は、母に疎まれる美しいヒロイン中の君の、亡き父を慕う哀切な心情を象るところからスタートする。起筆は、とくに引歌を指定するほどのことでもないが、慈円(一一五五～一二二五)の、

衣うつとほちの里の槌の音に 寢覚の人や袖ぬらすらん^(二)

は、措辞が酷似し、あるいはこれを踏まえるか。類想の歌として、藤原長方(一二三九～一二九二)の、
寢覚して聞けばものこそかなしけれ とほちの里に衣うつ声^(三)

などがあり、参考になる。いずれにせよ、歌語で綴った、いわゆる〈狭衣型〉の冒頭表現であり、つづく「朝の露に」云々でも、『源氏物語』「夕顔」巻の、

鳥の声などは聞えて、ただ翁びたる声に額づくぞ聞ゆる。立ち居のけはひたへがたげに行ふも、いとあはれに、
朝の露にことならぬ世に、何ごとむさばる身の祈りにかあらん、と聞きたまふ。⁽⁴⁾

(69頁)

とある一節に抛り、寄木細工風の技巧をこらす。このあらたまつた筆づかいは、いかにも作り物語の冒頭にふさわしい巧緻さで、次なる展開を期待させるに、十分であろう。

ところが、こうした抒情味ある文章は、冒頭部を限りにほとんど影をひそめ、以下は、およそ無味乾燥な、説明的叙述に終始する。そもそもこの物語には、引歌らしい引歌が見いだしがたいのだ。一句を引用・明示したかたちのものは三例⁽⁵⁾あるが、やや和歌的な言いまわしのあるのを除いては、引歌表現の片鱗もうかがえない。

こうした、冒頭部の表現の凝りかたと、大部分での平易・淡白な文体との落差を見る時、筆者にはやはり、衰滅への道をひたすむ物語の姿を見て取らぬわけにはゆかない。もっとも、そう感じるのも、多分に主観的なものであって、文体の感触からただちに作品の成立の新旧を云々するのは、慎むべきであろう。

ところで、この物語の成立時期に関しては、詳細な調査・検討はいまだしきものの、玉上琢彌氏の『風葉和歌集』(文永八年(一一二七)感)以後鎌倉時代末期成立との説が踏襲⁽⁶⁾され、これまでとくに異説もないようである。

玉上氏は、この物語の依拠した『源氏物語』本文が河内本系統であることをもって、青表紙本系統に圧倒される室町時代中期以前の成立にかかるとして、それを立証されたのであるが、それをさらに鎌倉時代の作と見るのには、結局「王朝の物語の流れに直ちに棹さすもの」との曖昧な理由づけがあるにすぎない。たしかに、成立時期の下ることを示すような内部徴証も見いだせない以上、諸特質に徴して、いかにも王朝物語の伝統に深々と根ざしていると考えれば、ひとまず氏のような結論に落ち着くのは自然の帰趨ともいえようが、はたしてそこには、いささかでも疑義の入りこむ余地はなかったであろうか。

今日、物語研究の活発化は、中世擬古物語をも巻き込みつつあるが、その信頼するに足る物語史は、いまだ構築さ

れているとはいいたい。かなり多数の現存作品も、『風葉和歌集』に見えるか否かで前後二期に大別される程度で、個々の作品の先後関係など、皆目見当もつかぬ状態である。とくに、『風葉和歌集』以後の成立と見られる諸作品については、これは鎌倉末、これは南北朝、これは室町まで下るか、などまことしやかに振り分けがなされているが、それがどこまで信のおけるものかは、正直に言って、はなはだ心もとないのである。

実をいえば、この物語の成立時期を論ずるのが目的なのではない。今はもっぱら、先の〈落差〉の認識の延長線上で、この物語に相対した時に生ずる、「王朝の物語の流れに直ちに棹さす」と見ることへの素朴な異和の感の問題としたい。これが筆者の独善でなければ、あるいはこの物語の成立時期に再考をうながすであろうし、成立時期は動かなくとも、物語史研究に多少の新知見を提供することにはなるうと思ふのである。大方の御批正をお願いしたい。

1

『木幡の時雨』もまた、当時の物語のご多分にもれず、先行物語の模倣・影響が著しい。従来も、『狭衣物語』『夜の寝覚』『住吉物語』等との関連が説かれて¹⁾いるが、全篇にわたってその影響を看取できるとなれば、やはりここでも、『源氏物語』をもって第一とせねばなるまい。

〈物語取り〉の方法は、さまざまなレベルを想定することができるが、一般に、構想取りから詞章の借用に至るまで、典拠のあることをわざわざほめめかすことは、稀なようである。しかし、その一方で、物語名や作中人物名を引用する場合も少なくない。この物語には、その両面をうかがうことができるが、とくに目につくのは、後者の頻用である。この物語は、四〇〇字詰原稿用紙にして七十枚足らずの短篇であるが、中に、都合四度にわたって、『源氏物語』の作中人物への言及・対比がなされている。それは次のごとくである。

- (1) (中ノ君ハ) ねび行くままに光さし添ふ心地して、うつくしなどもおろかなり。御髪は丈に二尺ばかりあまりて、

黒うつつくしう、裾は五重の扇をひろげたる心地して、いみじ。御前の人々も、尼君をはじめたてまつり、光源氏の女三の宮・紫の上などもかくやおはしましけん、とぞ、おしはからるるに、云々 (23ウ~24オ)

(2) (上略) など言へば、(中ノ君ハ) むつかしと思ふにや、縁の方に立ち出でて、柱に寄り添ひてながめ出だしたる、かの女三の宮の立ち姿、柏木の右衛門督、身をいたづらになしけるも、かくばかりにや、いとことわり、と御覽す。 (25ウ~26オ)

(3) この頃あはれと思す少将も、宰相の御子に中将といふ人見たまひて、御心ざしあさからず思ひたまへしかば、迎へて、北の方とてかしづきたまふ。いとたとしへなく泣きみ笑ひみ同じ心なりつる人に立ち離るるも、いとかなし。かの末摘花の侍従に別れたまひし御心もおしはかられて、いとあはれなり。 (35オ~35ウ)

(4) のたまふやうに、中の君の御ことも忘らるる世なき身ながらも、君を見たてまつれば、ゆかりの草とのみぞ思ほゆるや。光源氏は紫のゆかりに慰みたまひしぞかし。君はことに二葉におはすれば、いとこそあはれと見たてまつれ。 (44オ)

このような先行物語への積極的な言及は、『源氏物語』にも見られたものであり、『狭衣物語』ではとくに多彩をきわめ、方法的にはここで完成されたと見てよいであろう。この方法は、先行物語の人物像や事件等を一言のもとに想起させうる点において、細かな描写を試みるのとはまた違った、イメージのふくらみや余情をもたせることを可能にする。

(1) は、ヒロイン中の君の美貌を、女三の宮・紫の上に比したものの、(2) は、中の君を見そめた式部卿親王が、その美貌に、柏木を破滅に導いた女三の宮を思いあわせたもの、(3) は、中の君の、忠実な侍女、乳母子の少将との別れを、末摘花と侍従との別れによそえたもの、(4) は、愛する中の君の妹である妻三の君に、中の君を忘れえぬ身だからとて、決して疎略にあつかったりはしないということを、藤壺への叶わぬ恋に身をこがした光源氏が、その姪の紫の上

を得て幸せとなった例を挙げて説得したものである。

これらのうち(2)と(4)には、右述のような表現効果を看取することができるのであるが、(1)については、文脈上から女三の宮なり紫の上なりがとくに対比的に言及される必然性には乏しいとせねばならない。いわば(1)は、ただ単に美女の形容として、光源氏の二人の妻がもち出されているにすぎないのだ。このような、形骸化した、まるでお伽草子の決まり文句のごとき用い方は、中世擬古物語にあつても、例が少ないのではなからうか。多くはやはり引き合ひに出すべき必然性が認められると思うのである。しかし、こうした例の存在も絶無であるとの保証はないわけで、この一事をもつてこの物語の性格云々を論ずることは、やや性急にすぎよう。

が、次のようなことをも考えあわせる時、事態はいささかの問題性を孕んでくるのではあるまいか。(1)と、今度は(2)をもあわせ御覧いただきたい。ここでの美女は、誰あろう、女三の宮なのである。

およそ『源氏物語』を一読して、作中有数の魅惑的な美女として女三の宮の名を挙げることにできないのは、あなたがち現代の我々の目から見ての偏見とばかりもいえない。『無名草子』に、柏木を「はじめよりいとよき人なり」としつつも、「女三の宮の御事、さしも命にかふばかり思ひ入りけむぞ、もどかしき」との批判を見るがごとくである。もちろん、父朱雀院の晩年の愛子たるに恥じず、

ただいとあてやかになまめかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見えたまふ。桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさましたり。

(若菜下) 卷676~677ペ)

との六条院の女楽での有名な一節にも見る、ささやかであえかな美人ではあった。が、その未熟さ幼稚さは、一人前の女性としての、致命的な欠陥であったはずである。はたして、その欠陥を帳消しにするほど、その美質はきわだっていたであろうか。大きな疑問である。

それはひとまずおき、ではこの物語の作者は、いかに「若菜」以下の諸巻を読み、いずこにかかる美女としての資格を見いだしたのであるうか。それを知る手懸りとなりそうなのは、(2)に「かの女三の宮の立ち姿」とあることである。

(2)は、折しも柱に寄りかかって物思いに耽る中の君を見た時の、式部卿親王の連想であったが、実は、物語開巻ほどなく、中納言のぞき見た中の君の姿が、やはり〈立ち姿〉なのであった。

かかる所のならひにや、隙おのづから多かるに、さし寄りのぞかせたまへば、(中略)この帳台の障子口に、萩の単襲ひたぎに紅の袴長らかに着なして立てる人、十七八ばかりにやと見えて、あなめでたとふと見えて、にほひ、愛敬こぼるばかりに、うつくしなどもおろかなり。

(4オ〜4ウ)

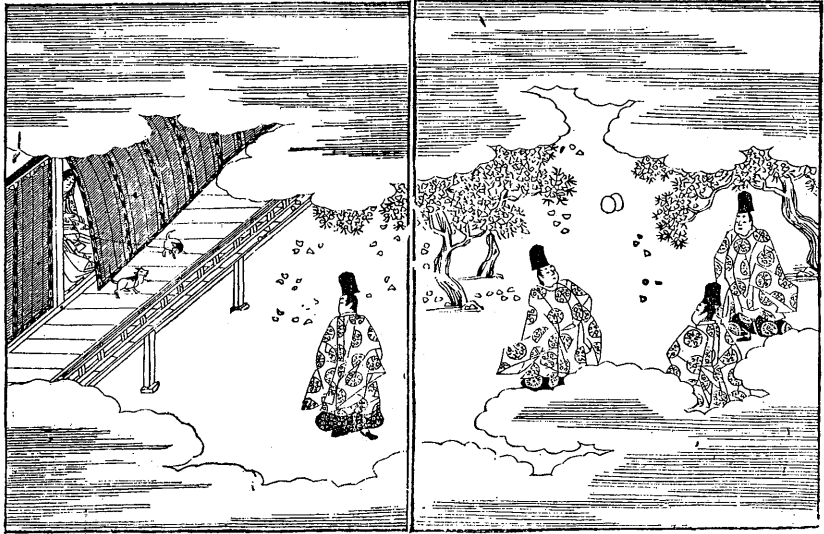
このぞき見の場面の少し前に、(1)の例もあらわれる。本条は、先の(2)の条とは、措辞の上からもまったく同趣向の繰り返しであり、この前後をも含めて、時雨が縁となつての男女の出会いという一連の叙述全体がびったり重なりあい、物語の構成上からも注意されるのであるが、こうしてみると、作者には、「若菜上」巻末、六条院の蹴鞠の折、柏木がゆくりなくも、「几帳の際すこし入りたるほどに、桂姿にて立ちたまへる」(63べ)女三の宮を目撃したくだりが、よほど鮮烈な印象をとどめていたとおぼしい。この一件により、女三の宮への柏木の思慕は無限に増幅され、『源氏物語』第二部の運命的な悲劇へと連なる。こうした展開の中で、源氏に睨み殺された悲運の貴公子柏木の相手役たる女三の宮にも同情が集まり、薄幸の美姫としてもち上げられてくる可能性は、考えられないでもない。しかし、これでは、まともな読みとしては、はなはだいかがわしいものといわざるをえない。

が、思えば、〈立ち姿〉を美的なものとして捉えているということ自体が、そもそも原作のはなはだしい誤読なのではなかつたか。唐猫による騒ぎの一部始終を見ていた夕霧の判断にもあるごとく、不用意に姿——それは〈立ち姿〉でさえあつた——を見られた女三の宮は、「軽々し」(64べ)と非難されてもいたしかたのないものであつた。室内の移

動にも膝行が原則の女性である、蹴鞠に注意を奪われて御簾近くに立っていたとは、何としても「不謹慎な挙措」⁽¹⁰⁾との謗りはまぬかれぬ。こうした点を読み誤らない限り、そうそう「女三の宮」美女の典型との思考は、働かないのではなかるうか。

してみると、この物語の作者の『源氏物語』への親昵度は、とうてい深いものではありえないことになる。我々とはもすると、物語作者たるもの、『源氏物語』はバイブルであって、そここの文句が自由自在に口を突いて出てくるほど、熟知・血肉化している——ついそんな思い込みにはしりがちであるが、警戒を要しよう。『源氏物語』の梗概書の出現が鎌倉時代にまで遡りうるという事実は、決して楽ではなかった『源氏物語』享受の現実を物語る。

では、この物語の作者が「若菜」巻のあたりを、原作について熟読・玩味していたとは考えがたいとすれば、かかる認識の発生径路とは、いかなるものだったのであろうか。この点については、もはや想像に頼るよりほかないが、(2)に見るごとく、「柏木の右衛門督身をいたづらにな」す悲話が、『源氏物語』をいちいち読むまでもなく、周知でありすぎたのではなかるうか。その話のあらあらは知っていても、実際に読んだことはない、というのは、ちょうど上総で少女時代を過した頃の孝標の女がそうであった。彼女は後に五十四帖をつぶさに味わう幸運を得たが、それもゆかぬまま——おそらく全巻読破にたえず——あやしげな知識を操って、物語創作に筆を染めることもあったであらう。そうした時、先述のような、へ悲劇の貴公子柏木↓その思慕の対象女三の宮↓薄幸の美女」というがごとき俗っぽい思い込みが脳裏に結ばれた、というような次第でもあったらうか。ただ、ここで、第二部をろくに読みなししていない者が、どうして「立ち姿」というような細部について、かえって正確な理解を有しているのか、といった不審がわいてくる。『源氏物語』を通読していても、女三の宮が桂姿で立っていたということが、読後感として本当に強く印象に残るかどうかは、一抹の不安がある。この矛盾の解決は厄介そうである。あえて想像を逞うするならば、中野幸一氏が『うつほ物語』の後続物語に与えた影響について考察された中で、『いはでしのぶ』巻二に、「直衣の上



『源氏物語』承応三年板本「若菜上」巻挿絵（九州大学文学部蔵）

に水浴みけん仲忠の大將」と「国譲下」巻の一節に言及しているのに注目され、物語絵巻によるこの場面の絵面化が知識の共有に絶大な力を貸していたと考えることによって、はじめて説明がつく、と論じられたような、物語絵の介在を想定することで切りぬけられようか。とくにこの蹴鞠の場面、絵面化には絶好の箇所であり、あながち無茶な想像でもあるまいと思うのである。

お伽草子の『猿源氏草子』には、京に出て網代の輿に乗る上臈を一目見て恋の虜となった鬮売の猿源氏が、義父南阿弥陀仏に相談する時、わが恋に柏木と女三の宮との恋を引き合いに出すくだりがある。そこでの『源氏物語』の読みのいい加減さ（源氏が籠を女三の宮から葵の上に移したとすることが、柏木の手紙に女三の宮が返書し「互の御心浅からず」子さえてきたとするがごとき）と、そこに添えられた絵が、くだんの蹴鞠の場面——左にめくれた御簾の蔭に立つ、女三の宮、右に蹴鞠の足をとめそなたを見やる柏木といった構図（この絵は『源氏物語』板本のものへ上掲挿絵参照）とほとんど違わない）であるのは、何かしら暗示的である。『木幡の時雨』と『猿源氏草子』——一見何の脈絡もない取り合わせ

であるが、こと柏木・女三の宮事件の理解度に関していえば、五十歩百歩というところであらうか。

こうした検討を経て見返せば、そもそも(1)において、美女の譬えに女三の宮と紫の上とを並べて出すというところに、この物語の作者の『源氏物語』に対する無理解のほどは、歴然としているのであった。「若菜上」巻以下、『源氏物語』第二部を読む者は、女三の宮の降嫁以来の紫の上の忍従・心労の日々をよく知っている。そのすべてを円満に包み込もうとする健気な身の処し方は、理想の女性の名に恥じないが、あまりに痛ましい。この立派な紫の上に相對する時、女三の宮の人間の欠陥は目を覆うばかりである。宮が理想の貴女であるのは、恋慕の情にうかされた柏木の網膜にうつった虚像にすぎぬ。そのかれでさえ、宮がかれの文を源氏に見られてしまったことを知った時には、おのれの不明に気づくところがあった。にもかかわらず、この紫の上と女三の宮とを美女の譬えに併置せしめる無神経さは、何としたことか。およそ第二部の世界を知らぬ手合いのしわざとせねばならない。

ところで、「女三の宮の立ち姿」なる文句は、たまたま管見に入ったところでは、『浄瑠璃十二段草子』三段にも見えるのである。

御曹司は籬の蔭に立ち忍び、花園山をながめたまへば、浄瑠璃御前のその夜の装束、いつにすぐれて花やかなり。
(中略) ものによくよく譬ふれば、楊貴妃、李夫人、衣通姫に、女三の宮の立ち姿、朧月夜の尚侍、弘徽殿の細殿も、これにはいかでまさるべき。⁽¹⁵⁾

「ものによくよく譬ふれば、……」とヒロインの美しさを縷説し、古来の美女の名を列ねるのは、いわゆるお伽草子の好んで用いる手法である。そういえば、この『木幡の時雨』には、前掲冒頭文でも、中の君の美貌を「古の衣通姫などもかうこそは」となぞらえるところがあったりし、美女のイメージの喚起のしかたが、はなはだお伽草子的なのであった。繰り返しになるが、それらは、新しい表現への意欲に著しく乏しく、「かうこそは」(冒頭文)「かくやおはしましたけん」(1)「かくばかりにや」(2)と少しずつ表現は変わるものの、引き合いに出された人物の性格なり美質な

りが、中の君の人物造型に投影しているとは、認めがたいのだ。すなわち、「かく」と等質性・相似をいいながらも、それは、外面的に漠然と美人であるということを示すにとどまっている。せいぜい〈立ち姿〉というやや具体的なイメージで女三の宮と結びつく程度である。それとて、外面的であることに変わりはない。したがって、結果的には、「これにはいかでまさるべき」とするお伽草子一流の誇大表現と、何ら選ぶところがないのである。

以上、この物語における『源氏物語』作中人物への言及箇所を採り上げ、いささかの検討を加えてきたが、ここで念のため、作品全体としての『源氏物語』取りの実態を確認しておきたい。幸いに、玉上氏が京都大学蔵本の翻字に際し、簡明な頭注を施しておられるので、そこでの指摘により、巻別の摂取回数を一覧にしてみると、次のごとくである（単なる用例と推測されるものは数に入れなかった）。

桐	壺	5
帚	木	3
夕	顔	5
若	紫	2
花	宴	3
	葵	2
須	磨	2
薄	雲	1
若	菜下	1
御	法	1
竹	河	1
総	角	1
浮	舟	1
合	計	28

もっとも、必ずしも厳密な意味で影響関係に立つとはいいがたいものも含まれるし、場面性を考慮すると一連のものとして二度の出現と見ない方がよいものもある。また、他に明らかな摂取と認められる箇所もなくはない。が、大勢をうかがうには、これでも十分であろう。

一目見て、思わず〈須磨源氏〉なる連想にかりたてられてしまう、摂取箇所の偏在ぶりである。その中でも、本当に作者がその表現を自家薬籠中のものとしてかなり自在に操っているのは、「桐壺」「帚木」「夕顔」の三帖にはほぼ限定できるようである。

中世において、『源氏物語』が必ずしも全巻通じてよく読まれていたともいいがたいことは、周知の事実である。

福田秀一氏は、鎌倉末期正和二年（一一三三）以前の成立にかかる、日記『とはずがたり』に現われた影響につき精査された際、「須磨」が群を抜き、他に「桐壺」「帚木」「夕顔」「若紫」「葵」「若菜上」「柏木」「総角」「浮舟」等の多いことを具体的に示され、さらに、「これは、中世の他の作品、特に物語における『源氏』の影響と、さほど違わないであろう」とされたのであったが、首肯される見解である。

それにしても、この物語における『源氏物語』取りの実態は、まことに粗末な限りである。構想取りはもちろん、人物取りも、場面取りさえも、さほど多くは認められないようである。そこには、単発的な詞章の撰取・流用を見るばかりである。そうした中で、最も構想ないし場面取りとの境にあるのは、次のような一節であろうか。

宮、いとあさましく、さればよ、もとの人の取りにけるこそは、かかればやうちとけざりし、と思しめさるるに、いとど御胸せきあぐる心地して、夜の御殿おとどに入らせたまひても、露まどろませたまはず。御膳もろなども御覧じ入るる事たえてひさしげにもせさせたまへば、云々
(30ウ〜31オ)

中の君を迎えに石山に使者を出したところ、その家が火事で焼亡し、すでに他所に移ってしまっていたと知らされた春宮（もと式部卿親王）の落胆を叙したくだりであるが、ここには、玉上氏の頭注にもあるように、桐壺更衣を失った帝の悲嘆を叙した「桐壺」巻の有名な一節が影を落していると認められる。

人目を思して、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふ事、いとかたし。朝あしたに起きさせたまひても、明るるも知らずと思ほし出づるにも、なほ朝政あさまつととは怠りたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず、朝餉あさかひの気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳など、はたいとはるけう思したれば、云々
(11ペ)

とくに解説は無用であろう。右のすこし後、この物語に、

春宮は、もしありし人に御覧じあふこともやと、数ならぬ召次めしつぎ・女官などまでも、ひとわたりは召して御覧ずれど、ありしばかりの火影にたち並ぶ人もなし。いかにせんと、今は位も何にかはせん、(中略)とぞ、思しめし

嘆かせたまふ。

(31ウ〜32オ)

と、春宮が中の君を求めて卑しい女まで召すのも、これまた玉上氏御指摘のとおり、

年月に添へて、御息所の御事を思し忘るる時なし。慰むやと、さるべき人々を参らせて御覽するにも、なすらひに思さるべきもなく、ありがたき世なりければ、もの憂くのみ、よろづ思しめしむすばほれたり。(13ベ)

とある桐壺帝の姿を写したものである。この一連の条など、『源氏物語』取りの水準としては、むしろ陳腐といった方がよいものであるが、この物語の中では上々の部類に属する。その他、「帚木」巻、空蟬を口説く源氏の巧者ぶりを評した「例の、いづくより取うでたまふ言の葉にかあらん」(42ベ)を模してみたり(28オ)、「夕顔」巻、「海人の子」(71ベ)のやりとりを撰り入れたり(7ウ)する(いずれも玉上氏の指摘あり)のであるが、特記するほどの技法的な特色があるわけでもない。

が、これを、『源氏物語』の模倣に汲々としていたご時世に、見上げた態度と、妙な感心のしかたをするのも誤りである。要は、華麗に典拠をちりばめようにも、貧しい知識では手も足も出なかったというだけのことであろう。継子いじめの骨格をもつ『小夜衣』が、詞章の面では『源氏物語』や『狭衣物語』一辺倒であったのは、よく知られるところだが、この『小夜衣』でさえ、作者の教養の低下が問題視されていた。⁽¹⁴⁾とすると、この『木幡の時雨』など、手に負えない無教養作品ということなのであろう。

美女の譬えに女三の宮を引用することに端を発して、この物語にうかがわれる『源氏物語』理解のほどを執拗に追跡してみた。結果、そのあまりの無惨さに、いかがわしくも、何のことわりなくお伽草子類と比較する暴挙にまで及んだ。しかし、今しばらく、筆者の狼藉をお許しただきたいと思う。

次に、この物語の構成上、特異な設定として注目される一趣向を採り上げてみたい。

愛する中の君の行方を知りえぬまま、主人公中納言は、ある一日、駒競べに出場、落馬・負傷してしまふのである。つくづくと過ぎ行くほどに、中納言の君、つれづれなるままに、嵯峨野の禁野のかたに駒競べして遊びたまふとて、馬より落ちたまひて、御腕みうでを突きて損じぬ。

(44ウ)

何ゆえにかねは馬から落ちてしまったのか。直前の文によれば、妻三の君が愛する中の君そっくりに美しく成熟してゆくを見つとも、「なほ片つ方の恋しさは、ややちまさ」るかれの心であったという。するとどうやら、愛する人にめぐりあえぬ絶望感から、馬を御す手にも力が入らなかつたものと見える。そのあたり、いますこし明快な心理的説明のほしいところであるが、ともかくも、その後の展開は次のようである。

殿・上、思し嘆きて、さまざま御祈禱いのりきこえたまふに、ある人、「津の国の湯に入らせたまひて、こころみさせたまへ」とあれば、「さらば」とて、親しき人々具もつせきこえて、御湯に七日ばかり入りたまひて、よくおはしませば、喜びたまふ事限りなし。

(44ウ)

完治したかれは、人々のすすめで難波わたりを見物し、淀川で舟遊びをする。ところが何という奇遇、折しも、かれの乳母子蔵人兵衛佐に求婚され、すぐにも手引きしかねない女房たちの油断ならなさに、屈辱を受けるよりは死をと、入水自殺を図っていたいという中の君を見いだし、救い取って京に連れ戻り、二度と手放さぬこととなる。すなわち、主人公の落馬という不幸が、恋人との再会という、物語最大の山場を導くしくみとなっているのである。

ここに見えるこうした趣向については、三角洋一氏に言及があるが、氏の指摘にもあるとおり、非常によく似た趣向が、室町時代物語（広義のお伽草子。中世小説などとも）の『あま物語』と『岩屋の草子』にも見えるのである。この両作品の相似については、つとに清水泰氏によつても説かれていたが、いまそれぞれの該当箇所を抜き出すと、次のごとくである。

・中頃、都に、左近の中将平兼光と申す人おはしけり。容顔美麗にして、才学人にすぐれさせたまへり。しかるゆゑに、御門、いとほしき事に思しめし、御前をすこしも放ちたまはず。さるほどに、御門、行幸ありける御供に参らせたまふとて、比叡坂本にて、馬より落ちさせたまひて、腰を損はせたまひけり。父母、大きに嘆かせたまふ。朝廷をはじめまゐらせて、公卿・殿上人にいたるまで、御とぶらひありけるに、ある人申すやう、「津の国なるはの浦のあまの湯と申すこそ、腰・肩を損さしたる者も、二七日入り候へば、かならず直り候ふ」と申しければ、「うれしくも申したる者かな。ことにわが所領なり」とて、いそぎくだしまゐらせたまひけり。都よりは、日にそへて、御使ひまなし。直らせたまふよし聞えしかば、「なのめならずの御よろこびにて、「とくどくのほらせたまへ」と、宣旨を下されけり。」

〔あま物語〕

・かかりける折節、一の人の御子、二位の中将殿と申す人おはしけり。八月十五日の月くまなきに、隨身・侍引き具して、賀茂の河原に立ち出でて、駒競べして遊ばせたまひしに、中将殿馬より落ちて、左の腕を突き損じ、伊予の国は殿下の分国なりければ、腕療治のために伊予へ下りたまひぬ。八月九月療治して、もとのごとく直りて、都へのぼりたまふ。

〔岩屋の草子〕

これらにおいては、いかなる理由なりと、ともかくも主人公が難波〔木幡の時雨〕『あま物語』なり明石〔岩屋の草子〕なりを訪れるように設定すればよかったのであって、要はヒロインとのめぐりあいを導くための方便にすぎないのであるが、それをことさらに、〈落馬↓湯治〉という展開のもとにおいている点に、三作品共通するものが認められる。物語の話柄の類型性からいえば、めぐりあいという定石までの一過程にすぎず、いかなる機縁で赴くかは、いわば作者の自由領域に属しよう。そうした時に、このような類似はいかに考えるべきか。

それにしても、この三者は、実によく似ている。それは単に同趣向というにとどまらない。選ばれた措辞、叙述の展開までもが、符節を合わせたようになっていのである。いま三者の要点を対照して示せば、次のようになる。

木 幡 の 時 雨	あ ま 物 語	岩 屋 の 草 子
<p>中納言は 嵯峨野の禁野で 駒競べをし 落馬し腕を突き損じる 両親は心配し祈禱を尽くす ある人のすすめにより —— 津の国の湯に行き 七日ほどで完治</p>	<p>左近中将平兼光は 比叡坂本で 行幸供奉の際 落馬し腰を損う 両親は心配し天皇以下諸卿の見舞あり ある人のすすめにより そこは父の所領でもあり 津の国なるはの浦のあまの湯に行き 二七日で(?)完治</p>	<p>二位中将は 賀茂の河原で 駒競べをし 落馬し左の腕を突き損じる —— 父の分国であるため 伊予の湯へ行き 八月下旬より九月まで滞在し完治</p>

こうした一致度の高さを見る時、おそらく誰しも直接的影響関係を認めたい衝動にかられよう。すなわち、最も成立の早い『木幡の時雨』の後続作品への影響というかたちで関係づけるわけだ。が、事は慎重を要する。

影響関係を考える際、まず明らかにされておかねばならないのは、先行作品の広般な流布の事実である。その点が『木幡の時雨』の場合、問題なのである。甲南女子大学蔵本に添付された佐野紹益(二六〇七—一六九二)の書状にこの物語の稀観の珍本たることを説いているごとく、また、現存諸本に徴しても、この物語の盛んな享受の形跡はたえて見ることができない。さらに、常識的に見れば、平安朝物語の正統的な後裔たる中世擬古物語と、そこからある断絶を経て現われた、存立の基盤も異質な室町時代物語とに、同族的な直接交渉を安易に認めることへのこだわりもある。となれば、『あま物語』と『岩屋の草子』相互の関係はともかくも、この二作品と『木幡の時雨』との直接の関

係はなかつたものと判断せざるをえない。

が、こうなると、事はかえって紛糾してくる。人間の想像力などたかが知れているとして、偶然の一致を説くことはやさしい。だが、こうまで細部での符合を見る時、万が一の偶然など信じる気になれようか。すると、やはりここは、ある原拠の存在を想定しなければ、説明がつかないであろう。そしてそれは、『木幡の時雨』が原拠たりえない以上、それに先行、影響を与え、さらに下って『あま物語』『岩屋の草子』にまで遺響のあつた、往時はかなり有名な物語であつたと考えられよう。三角氏はこの物語に散佚『いはや』『岩屋の草子』の粉本と目される)を擬せられるが、そのあたりの臆測は、手懸りとなる材料に乏しすぎ、筆者には容易に判断を下すことができない。

ところで、この主人公の落馬という趣向については、大槻修氏が、「物語の男主人公が、嵯峨野で遊ぶ途中、落馬する——という風情のなさも、やはり時代の移り、であろうか」との感想をもらされているが、これは実感であろう。もっとも、落馬など、馬と人間との関わり合いの当初から無限に存在しえたわけで、日常レヴェルでは、さして事件というにも足らぬものであつたに違いない。したがって、それを文学の素材として採り上げるか否か、そしてそれをいかに形象化するかは、作家個人の問題意識にかかる点が大であろう。確かに作り物語の世界において、主人公の落馬シーンなどというものは、たえて見られないものであつた。

試みに、説話集等に散見する落馬にまつわる逸話をいくつか拾ってみよう。最も著名な話としては、『今昔物語集』巻二十八(笑話の巻である)第六話、かの清原元輔のエピソードがある。賀茂祭の奉幣使となつた元輔が、一条大路、大勢の見物人の前を渡る時、つまづいた馬からまさかさまに顛落、冠を落して禿頭をさらけ出し、群衆の大爆笑をかつたが、いさゝ意に介せず、かえって笑っている見物人たちに、笑うべからざる理由を説教してまわつたというもので、話末に、「此ノ元輔ハ、馴者ノ、物可咲ク云テ人咲ハスルヲ役ト為ル翁ニテナム有ケレバ、此モ面無ク云也ケリ」とあることによつても、話の性格が知れようというものである。元輔の場合、かれの面目躍如たる滑稽譚として

仕上っているが、こうした類例は多かつたらしく、『古事談』巻二第八十話には、藤原保忠（八九〇〜九三六）が近衛大将として騎乗出行した時、前駆が急ぐため、ついて行こうとして、「落馬落冠及恥辱(ニ)」⁽²⁸⁾んだとある。また、『雲州消息』上巻二十一往状にも、賀茂祭の行列の前駆をつとめていた帯刀の某丸が落馬し、「適雖不落冠(ニ)」⁽²⁹⁾其巾子已蟄(ニ)如林宗之冠(ニ)。上下人々拊掌(ニ)耳(ニ)」⁽³⁰⁾という事件を記す。

こうして見てくると、そのままで物語の素材を提供してくれそうなものはないのであるが、ただ一つ気をつく点は、落馬それ自体には、格別恥ずかしいことも不体裁なわざとも記していないことである。『古事談』『雲州消息』いずれの例にも「桃尻」なる語が見え、乗馬に先天的に不向きならばいたしかたないという含みさえ感じさせる。まづかったのは、冠を落したり、巾子をひしゃげさせてしまったりした点なのである。『今昔物語集』巻二十八第二十六話のごとき落冠だけを探り上げた逸話があっても、落馬のみに焦点を絞った話を見いだしがたい所以である。『古今著聞集』巻十馬芸第十四第三六九話には、競馬の勝負に勝ったが馬場末で落馬して死んだ（氣絶しただけかもしれない）秦頼峰が、やがて息を吹き返したものの、冠がひしゃげて父の面前に戻りかねていた時、父の助言で、「下人が烏帽子を引き入れてあげて参りたりける、いみじう見えけり」⁽³¹⁾などという実にあっけらかんとした逸話があるが、ここには落馬したことへの、れなど、微塵もないのであった。

してみると、落馬なる趣向を擬り入れたとて、決定的に主人公のイメージ・ダウンになるともいえないようであり、ただちに「風情のなさ」をいうのは、いささか早計にすぎるのではあるまいか。たとえば、『平家物語』巻四、有名な橋合戦の段のはじめに、「宮は、宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり。これは、さんぬる夜、御寝のならざりしゆゑなりとて」⁽³²⁾とある高倉宮以仁王の南都への逃避行を叙した部分など、むしろ悲劇性さえ感得されよう。要は、趣向そのものの功罪ではなく、それを取り込んだ手際の巧拙に帰せられねばならない。

『木幡の時雨』の主人公も、馬術につたなくて落馬したわけではなかったろう。駒競べに出るというだけでも、日

頃のかれの好尚、推して知るべしである。前述のごとく、その時かれの心を占めていたのは、愛する中の君に逢えぬ嘆きであった。ところが、落馬の叙述に際しては、格別かれの内面に立ち入ることをしなしたため、そのあたりの必然性に、いささかの抵抗を感じないでもないのであるが、あらためて見返せば、「つくづく」とあるいは「つれづれなるままに」といった文辞に、前からの心理的連続性を読み取ることは、比較的容易であろう。作者としては、おそらくそういう心算であったと思われるが、表現がややお粗末にすぎたのである。危うく中納言は、読者の同情と共感とをとりがしかなないところであった。しかし、『木幡の時雨』にしろうじてとどめられていた主人公落馬の必然の糸も、『あま物語』『岩屋の草子』にはもはや失われている。『あま物語』では開巻すぐに見えるのであるから、主人公落馬の前提となる事情などあるはずもないし、『岩屋の草子』ではちょうど作品半ばあたりになるが、二位中将はここではじめて登場する（話の前半と後半とで主人公が変わるというこの作品の構成の異様さは、すでに論のあるところである）のであって、落馬の必然性のないこと、『あま物語』の場合同様である。何の前おきなく主人公たる者を落馬・負傷させておいて、いけしゃあしゃあと筋の展開を計る凶太さは、貴人の尊嚴の失墜はいうまでもないが、これこそ室町時代物語らしい一面のあらわれとはいえよう。してみると、同一趣向に酷似した表現を用いるという近親性と、主人公の扱いに見る文学性の質的懸隔からうかがわれる疎遠性との、微妙なバランスを保って相對峙する作品群とでも評することができようか。

直接には繋がらなくとも、無縁ではありえない、そのような関係を生じさせる物語史的な動向とはいかなるものがあるうか。さまざまなヴァリエーションを派生させながらも、ますます類型・固定化の一途をたどる中世擬古物語は、意外に早くお伽草子的なものへ脱化するのかもしれない。そうした時期にあつては、一回的な作物の受容もさりながら、使い古されすっかり定型化した話柄——それは語り口まで固まっていたかもしれない——こそ、かえって安心感をもって受け入れられることもあつたらう。作品としてでき上った時、一部の目立った類似をとどめても、結局

は異種の作品としかいいえない『木幡の時雨』と『あま物語』『岩屋の草子』とであろうが、作品形成に与った材料は、案外大同小異であったかもしれない、現存する物語類を羅列するだけではいかんとも捉えがたい、目に見えない物語の水脈を探ることの必要性が痛感される。そうした時、散佚『いはや』や散佚『あま』の存在も、あらためて重要な意義を担ってこよう。

む す び

『木幡の時雨』——このささやかな中世擬古物語に対して、本稿で試みた考察は、あまりに放恣にすぎたであろうか。ただ、誤解なきをいただきたいのは、決してこの物語を室町時代物語に格下げしてしまえなどといった暴言を吐いているわけではなく、物語史上、興味ある位置に据えて見ることができないか、そうしたかすかな予感から出発した、手懸りの模索なのであった。すなわち、「王朝の物語の流れに直ちに棹さすもの」というより、王朝物語から室町時代物語へと変貌をとげる、過渡的な姿を見せているものとして、捉えなおしてみたのである。

たとえば、従来、物語の改作という時、あるいは『古とりかへばや』と『今とりかへばや』のごとく、あるいは『風葉和歌集』所載歌をもつ室町時代物語の場合のように、一対一の直接関係に立つものをそれと認めてきたのであるが、改作の概念をもっとゆるやかにして、類想をもつ作品群の消長を考えてみる視座を用意してもよいのではあるまいか。個別的に論じるよりは分類整理して考えるのは、膨大な量の室町時代物語を扱う際の有効な方法として、いわば常道であるが、それがどちらかというところ共時的な把握に強く、必ずしも王朝風擬古物語との関係といった通時的な視点を十分に提供してくれない憾みのある一方、改作を論じる際、ひたすら当面の個別的な変貌の跡づけに集中し、それらを取り巻く物語史的状況への顧慮が足りないことの多いのが、今日の物語研究の実状であろうかと思う。

要は、一つの作品からまた一つの作品が生まれるというような単純な図式では、衰退期の物語の実態はおよそ捉えが

たいということである。

『しのびね物語』の改作について論じられた神野藤昭夫氏は、散佚古本『しのびね』↓現存改作本『しのびね』↓室町時代物語『しぐれ』という系譜をたててその変貌の様相を追跡されたのであるが、中に、『しぐれ』に至る改作のあり方は、先行する種々の物語を併呑し、しだいに類似の相貌になってゆくような類型的没個性的改作のあり方なのである」とする、注目すべき見解³³が見られる。おそらくこれは、改作に限らず、物語史全体を覆い尽くそうとする大きな流れであると考えてよいのではなからうか。『木幡の時雨』という一作品に相對しながら、筆者にはその感が深い。³⁴

一回的創造などという美しい幻想は、ここではむしろ邪魔ものでさえある。

ともあれ、さまざまな動搖を内包しながらも、この『木幡の時雨』が平安朝物語の系譜に何とか連なろうと努力しているのは確かであり、それは物語掉尾を飾る一文にもうかがわれる。

その頃の口さがなき古御達どもの、かかる忍びごとを末の世のためしにとて聞え出でぬるぞ、かるがるしきや。

(63オ)

この「帚木」巻頭³⁵を模したとおぼしき跋文を記し終え、まがりなりにも王朝物語風の首尾を整ええたことで、作者はそこはかとなき満足の吐息をもらしたかもしれない。しかし、こうした枠組みを施してようやくそれらしい体裁を保つだけの物語が、これまでの物語史に活力を与ええようよしもない。物語の黄昏は、ここでもまた深々と暮れようとしていた。が、と同時に、そこには、新たな再生のための素地が、かすかながら見透せるようでもある。

(一九八三年十一月稿)

注

(1)

『木幡の時雨』の引用は大槻修編『吉田忠氏旧蔵甲南女子大本こわたの時雨』(昭56、和泉書院)に拠り、適宜表記を統一し、濁点・句読点・会話符をつけるなどして、読みやすくした。引用本文末に所出丁数・表裏を示す。翻字にあたっては、田村悦

子「研究資料」吉田忠氏蔵『こわたの時雨』公刊 上・下〔美術研究〕282号 昭47・7、287号 昭48・5)ならびに大規模「対校」『こわたの時雨』吉田家本・高松宮家本・京大本〔源氏物語を中心とした論攷〕〔昭52、笠間書院〕所収の裨益を受けたところが多い。

(2) 『拾玉集』二・詠百首和歌・擣衣・『私家集大成 中世I』一四二八番。

(3) 『長方集』秋・遠聞擣衣・『私家集大成 中世I』九三番。

(4) 『源氏物語』の引用は秋山虔・池田利夫編尾州家河内本『源氏物語』(五冊。昭52、53、武蔵野書院)に拠り、所出ページを通算ページで示した。河内本を用いる理由は「はしがき」中に述べるところがある。引用文を適宜校訂したこと、『木幡の時雨』の本文の場合に準ずる。他の作品の引用についても同然。

(5) ・「うらなくものを」と言ひけるわたりにや、云々(5才)

・「ふみとどろかし鳴る神も」とこそいへ。(17ウ)

・「夢と知りせば」といとかなしく、云々(40才)

それぞれ『伊勢物語』四十九段、『古今和歌集』卷十四・恋四・読人しらず〔国歌大観〕七〇一番、〔同〕卷十二・恋二・小野小町〔同〕五五二番の歌を踏まえる(玉上氏の指摘あり)。

(6) 「こはたの時雨論攷」〔国語国文〕昭12・10。

(7) 『狭衣物語』『夜の寝覚』については注(6)玉上論文、『住吉物語』については小木喬「時雨」にちなむ物語(鎌倉時代物語の研究)〔昭36、東宝書房〕所収 参照。

(8) 久下晴康「狭衣物語の形成——『源氏』取りの方法から——」〔国文学研究〕72集 昭55・10)に詳しい。

(9) 新潮日本古典集成『無名草子』(昭51) 38p。

(10) 小学館日本古典文学全集『源氏物語四』(昭49)当該箇所頭注。

(11) 小木喬著『いほでしのぶ物語本文と研究』(昭52、笠間書院) 351p。

(12) 『うっほ物語の研究』(昭56、武蔵野書院)第七章二「うっほ物語の影響」。

(13) ちなみに、「中世末期における源氏絵制作のデザイン集」(清水好子「源氏物語絵画化の一方法——『源氏物語絵詞』紹介——」)〔源氏物語の文体と方法〕(昭55、東京大学出版会)所収)たる大阪女子大学蔵『源氏物語絵詞』には、「若菜上」巻の「絵能所」十四箇所の一としてあがっており(85才)、秋山光和『源氏物語絵詞』所収場面一覧と作品例との対照表

『木幡の時雨』の再検討

- (14) 「日本の美術」119号 昭51・4)に徴せば、室町時代末期の土佐派による作例の少なくないことが知られる。
- (15) 岩波日本古典文学大系『御伽草子』(昭33)168~169頁。
- (16) 新潮日本古典集成『御伽草子集』(昭55)20~21頁。
- (17) 市古貞次著『中世小説の研究』(昭30、東京大学出版会)第七章2「中世小説に於ける人間の問題」参照。
- (18) 「こはたの時雨(鰯刻)」(『国語国文』昭12・10)。
- (19) 「中世文学における源氏物語の影響」(『中世文学論考』昭50、明治書院)所収。
- (20) 桑原博史「小夜衣について」(『中世物語の基礎的研究資料』昭44、風間書房)所収 参照。
- (21) 「あま入」の成立と趣向」(『中古文学』21号 昭53・4)。
- (22) 「あま物語に就いて」(『国語国文』昭13・1)。
- (23) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第一』(昭48、角川書店)536頁。
- (24) 新潮日本古典集成『御伽草子集』(昭55)165頁。
- (25) 田村悦子「吉田忠氏蔵『こわたの時雨』について 下」(『美術研究』277号 昭46・9)参照。
- (26) 大槻修「『こわたの時雨』伝本考」(『源氏物語を中心とした論叢』昭52、笠間書院)所収)に現存諸本の関係を詳述する。
- (27) 「はかなげな女の悲恋の物語——夕顔・浮舟の女性像の系譜をたどって——」(『甲南女子大学研究紀要』創立十周年記念号 昭50・11)。
- (28) 小学館日本古典文学全集『今昔物語集四』(昭51)194頁。
- (29) 小林保治校注『古事談上』(昭56、現代思潮社)189頁。
- (30) 三保忠夫・三保サト子編著『雲州往来享禄本研究と総索引本文・研究篇』(昭57、和泉書院)29頁。
- (31) 岩波日本古典文学大系『古今著聞集』(昭41)296頁。
- (32) 岩波日本古典文学大系『平家物語上』(昭34)308頁。
- (33) 松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語(統)——『伏屋』『岩屋』『一本菊』外——」(『斯道文庫論集』5輯 昭42・7)参照。
- (34) 「『しのびね物語』の位相——物語史変貌の一軌跡——」(『国文学研究』65集 昭53・6)。
- 『木幡の時雨』がいかなる先行物語群の諸パターンを組み合わせながら形成されたか、また、前後の類想をもつ作品群と

いかに関わるか、といった点については、稿をあらためたい。

(35) 「光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかる好き事も末の世にも聞きつたへて、かろびたる名をや流さんと、忍びたまひける隠るへ事をさへ、語りつたへたる人の言ひさがなさよ」(21ぺ。玉上氏の指摘あり)。

〔付記〕

本稿をなすにあたっては、昭和五十七年六月から都合二十七回、約一年にわたって行った本物語の輪読会での成果によるところが大きい。毎回面倒な注釈原稿を担当し、熱心に取り組んでくれた学生諸君に、心からお礼申し上げたい。

また、本稿脱稿後、同じような問題意識から、『兵部卿物語』の成立時期をめぐって(『文献探究』13号 昭58・12)と題する小論をまとめた。あわせ御覧いただければ幸甚である。